

松山市教育会情報

発行所 松山市教育会
松山市祝谷町1-5-33
☎ 089-933-0354
発行責任者 田中務
編集 調査研究部

今年度もよいお話が聞けました



副会長
菅野拓也



—ひたすら努める～ふるさとへの思い～—
「ふるさと松山」挿絵より

会員の皆様、いかがお過ごしでしょうか。

さて、昨年(平成24年)の11月3日(土)、山本昭弘松山市教育委員会教育長様、田鍋修愛媛県教育会理事長様、松本真美松山市小中学校PTA連合会長様、平井有年松山市教育委員会学校教育課長様、一色光愛媛県教育会常務理事様をご来賓としてお迎えし、多数の会員のご参加のもと、“まつやま教育フォーラム24”が文教会館において盛大に開催されました。これは、11月1日に行われた愛媛教育推進大会に引き続いて、「えひめ教育の日」記念事業の一環として開催されたものです。開会行事に引き続いて、「坂村真民の人生と詩の魅力について」と題して、坂村真民記念館長の西澤孝一様のご講演があり、愛あふれる真民先生の世界に浸ることができました。また、午後の懇親会では、白寿、傘寿をお迎えをした大先輩の皆様や本会役員としてのご功績により感謝状を授与された皆様をお迎えして懇親・祝賀会が開かれました。ちなみに、本年度、白寿を迎えた先生は3名、傘寿を迎えた先生は46名でした。会員一同、益々のご健勝、ご多幸をお祈り申し上げます。

私たち現職にある者にとって、こうした松山市教育会の行事にご一緒させていただくことを通して、先輩の皆様の現役当時と変わらない元気なお姿を拝見できることを何より嬉しく思います。そして、温かいご指導をいただくことによって、初心に立ち返って職務に取り組もうという気持ちになります。今年度も講演会や研修会で、とってもいいお話が聞けました。教育会は、市教研と共催の行事も多いですので、現職の先生方にはぜひお気軽にご参加いただきますようお願いいたします。

平成24年度報賞者

松山市教育会



亀井 壽一 先生
会 長



菊池 晶子 先生
理 事



金本 和樹 先生
理 事



山田 重明 先生
理 事



越智 裕子 先生
理 事



芳居 洋子 先生
専門部員



(味生支部)
山本 雄二 先生
支部長



(桑原支部)
武市 徹 先生
支部長



(湯築支部)
大西 信也 先生
支部長



(小野支部)
渡部 平人 先生
支部長



(味生第二支部)
今井 秀明 先生
支部長



(河野支部)
永井 邦夫 先生
支部長



(堀江支部)
高山 佳子 先生
事務局長



(北条支部)
住田 邦彦 先生
事務局長

「えひめ教育の日」記念事業

「まつやま教育フォーラム24」高齡慶祝者名簿

白寿・傘寿

	氏名	支部		氏名	支部
白寿	船田政興様	高浜	傘寿	直野大蔵様	小野
白寿	橋 惟材様	浮穴	傘寿	和田重雄様	小野
白寿	村上勝利様	姫山	傘寿	大野勝美様	石井
傘寿	廣瀬幸一様	番町	傘寿	岩崎禮子様	石井
傘寿	朝雲 学様	味酒	傘寿	梁瀬秀子様	椿
傘寿	鈴木慶政様	八坂	傘寿	末廣通男様	石井東
傘寿	黒光博丸様	東雲	傘寿	阪本安光様	石井東
傘寿	小暮 照様	東雲	傘寿	三好二郎様	石井東
傘寿	三好 功様	東雲	傘寿	宇都宮 保様	味生第二
傘寿	西原信雄様	東雲	傘寿	井上 數満様	石井北
傘寿	宮田頼行様	素鷲	傘寿	白方 茂様	みどり
傘寿	武井邦夫様	潮見	傘寿	吉本喜代成様	福音
傘寿	大塚洋子様	桑原	傘寿	兼平 匡様	双葉
傘寿	中山 厚様	桑原	傘寿	古川義晴様	窪田
傘寿	大浦健二様	桑原	傘寿	永嶋伊佐子様	姫山
傘寿	安藤龍雄様	道後	傘寿	真部明雄様	姫山
傘寿	長尾皓二様	余土	傘寿	門屋哲也様	姫山
傘寿	吉田節子様	余土	傘寿	吉野幹憲様	正岡
傘寿	藤原恭慶様	湯山	傘寿	北尾洪正様	北条
傘寿	岡本明夫様	伊台	傘寿	門田貞子様	北条
傘寿	山之内忠幸様	久米	傘寿	清水 浩様	河野
傘寿	乃万浩二様	久米	傘寿	越智右介様	粟井
傘寿	河本ユウミ様	浮穴	傘寿	管 薫明様	中島
傘寿	玉井幹夫様	小野	傘寿	河崎富枝様	中島
傘寿	竹本輝明様	小野			

思い出の学校

五明中学校（廃校）の思い出

門屋 哲也（姫山支部）

1. 上流よければ下流よし

通勤バスが山田池にさしかかるところ、伊台と五明の合同車中職員会が始まる。「伊台の数学の平均良かったですな。」「それは上流の五明がええから、下流の伊台がよくなるんぞな。」といった調子である。当時は学力テストが実施され、テストの交換採点がなされていたのである。（極秘処理事項であった筈だが……）

2. こんな時こそ

二日続きの大雪に見舞われたことがある。「こんな時こそ出勤せにゃいかん。」校長Yの指令により、全員が徒歩で通勤した。実川^{カネガワ}辺りは歩ける状態ではなかった。学校に辿り着いた時はとくに昼を過ぎていた。（山奥から通学の生徒は既に着席していた……）

3. 五明ニンジンと伊台ゴボウ

市教委の合同訪問が近付いてきた。先生も生徒も保護者も環境整備に一丸となって取り組んだ。市教委の先生方には、辺地で頑張っている生徒や先生の姿にねぎらいの言葉をかけていただいた。ついでに五明ニンジンの愛らしさ、伊台ゴボウのたくましき、純白の大根の清らかさまでほめてもらった。（そして、それらを手土産として……）

4. 選手一人に旗手一人

陸上競技大会に、走り巾とびのM君と旗手を務める生徒会長のN君を派遣した。二人は堀之内競技場で、堂々たる入場行進を演じたのである。M君は後にN高校に進学し、三段とび県高校十傑にまで成長した。（無謀といえば無謀……）

5. めざせ城山・城下町

まじめな生徒たちの合言葉は、進学にしても就職にしても「城山をめざせ」であった。バスが山田池まで下りると、城山が見え始める。二台続きの通学バスに席を占めることがみんなの願いであった。（さて、この時の進学率にオドロキ……）

（この記事の一部分は、平成2年発行の「五明中学校誌」にて発表済みである。）

同窓会の力で高まる喜須来小学校（旧西宇和郡）

宇都宮 保（味生支部）

八幡浜市立喜須来小学校は、佐田岬の基点に位置し保内町にある。明治25年二つの村が合併して本校が誕生、今年で120年を迎えている。私が着任した昭和54年は、創立90周年記念の3年前、記念事業への対策、準備活動に直面していた。小学校での同窓会は珍しく思えるが、それなりの歴史的曰くがあり願いがあった。

開校当時の喜須来村は、半島を結ぶ交通の要衝でありながら、同郷の商工業で隆盛を極める川之石町、広大な森林を財産区にもつ豊かな宮内村とは、対比できない貧村であった。この地で生きる区民の切なる願いは、行き着くところ「人づくり、学校づくり」となり、やがて同窓会の結成、更には10年毎の記念事業へと定着したのである。

昭和57年90周年記念事業では、何を課題とし、何を次代へ繋ぐか、PTA・同窓会役員、学校と何度か会を重ね、協議を積んでいった。その過程の一こま一こまから世代を超え立場を克服した一体感が生れ、絆となり力となって記念行事の数々や記念誌づくりを成し遂げ、責務を終えた。誰の脳裏にも記憶として刻まれていることと思う。

斯くして7年後、私自身が校長として就任した。創立100周年記念事業として、30年先50年先にも耐え得る願いの結晶として、老朽化した校舎の改修工事は、避け難い責務のように思えた。同窓の町会議員、教育・行政関係者の



支援を得て、約1億5千万円の大工事が、平成4年末節目の記念塔として竣工した。同時に子ども
の大臣表彰もあり、正門脇には同窓の39代横綱前田山の銅像除幕も花を副えた。

翌年定年で退職したが、地域を遠く離れても、心は今も通っている。

「やまびこ音楽祭」—柳井川小学校の思い出—

大野 勝 美 (石井支部)

思い出尽きぬ学校ばかり。ふるさとの直瀬中学校。火災に遭った北久米小学校、“焼くな、殺す
な、怪我さすな”の大原則を守れなかった新採教頭としての責任が悔まれる。

わけても、新米校長として勤めた柳井川小学校。「小さいからできる」「小さくてもできる」をモッ
トに44名の山の学校での「やまびこ音楽祭」は記憶に新しい。夏冬を問わず始業前10分間の発
声練習(やまびこタイム)は、澄み切った山の空気を揺るがせた。NHK全国学校音楽コンクール
に毎年出場し、最優秀校に選ばれたこともあった。そこには、自信と誇りに満ちた子どもたちの姿
があった。とんがり帽子の新校舎も完成し、時代は昭和から平成へと移った。国道を通る人たちが
喫茶店とまちがえてコーヒーを注文され、快く振舞ってあげたこともあった。

平成元年12月10日、久万の産業文化会館には、500名に余る人たちでごった返していた。郡外か
らの方も多く、感動の一日となった。後日、参観者から十数通の感想が寄せられた。



「(略) 軽い気持ちで席についた。幕が開いた途端、言いよ
うのない感動が胸をよぎり、最後まで涙が止まりませんで
した。まず発声に驚き、子どもさんの指揮者を見つめる目、
身じろぎ一つしない自信あふれる態度、(略) 音楽祭は正
に子どもが主役で、大人の顔はなく、校長先生のお話もあり
ませんでした。過疎を逆手にとったこの学校文化は、教
育にへき地なしの証しとなっていました。(略) フィナー
レの『ふるさと』の合唱では、みんな涙を拭い、幕が下ろ
されてもなかなか立ち上がろうとしませんでした。」

天谷小学校への想い

河崎 富 枝 (中島支部)

昭和53年、43歳で赴任した天谷小学校(中島吉木・平成
21年閉校)は、シーサイドホテルの愛称にふさわしい環
境の中に建つ美しい学校であった。そこで私は、素直で活
力に溢れた児童と、豊かな指導力を持つ後輩とに出会い、
年来の思いが何であったかをはっきりと把握することが
できた。

生家も婚家も中島であったため、在職中はずっと自宅通
勤範囲に奉職できた感謝の気持ちをどんな形で表したら良
いかという思いが年々強くなっていたのだが、ここで相談
にのってもらった若い社会科主任から「郷土資料を取り入
れると良いことになりますよ。」との助言をもらった。

テレビのない時代に育った私には、夜毎に聞いた昔話、探検気分
で尋ねた古墳や遺跡、わらべうたで遊んだ経験がたくさんある。
それらを各教科の導入や発展課題に取り入れて指導していった
ところ、学習が分かりやすかった、中島に生まれて良かった等、
特に、記憶中心だと思っていた歴史学習が好きになったと望
外の反応をもらうことができた。

改めて、地域資料で学ばせることに意義を感じ、地区出身の
後輩の指導と協力を受けながら、副教材に耐える資料を集めて
いき、共著で「中島のむかし話」「中島の歴史物語」楽譜付き
の「中島のわらべうた」を順次刊行した。これ等の刊行物は町
教委の世話で各校の規模に合う冊数が配布され、一般の希望
者には販売している。加えて私のボランティア活動の芯柱にも
なっている。

今でも、天谷小学校時代を想うと、私のささやかな置土産はこ
こでの実践が起点になり、素晴らしい後輩のリードと支えによ
って形を整えることができたのだと、感謝の念に浸ることが
できる。



かつての天谷小学校(今も校舎は残っている)

「えひめ教育の日」記念事業 <まつやま教育フォーラム24> 講演会

「坂村真民の人生と詩の魅力について」

H24.11.3(土)
 文教会館にて

講師
 坂村真民記念館
 館長 西澤孝一 氏

昨年の大震災は、日本人の生き方とその価値に大きな影響を与え、自分自身の生きる拠り所となるものを見つけ出し、本当の豊かさとは何かを真剣に考える人が増えてきている。

私たち、一人一人が、自分の生き方を見つめ直し、新たな時代に向かって生きてゆくことを考えるときに、そのきっかけを作ってくれるヒントが、坂村真民の詩とその生き方にあると思う。

坂村真民の人生

1909年(明治42年)、熊本県玉名郡府本村(現・荒尾市)生まれ。本名、昂(たかし)。8歳の時、父親が急逝し、どん底の生活の中、母を支える。神宮皇學館(現・皇學館大学)卒業後、熊本で教員となる。その後、朝鮮に渡って師範学校の教師に。終戦後、朝鮮から引き揚げて愛媛県に移住。高校の教員として国語を教え、65歳で退職。

58歳の時、砥部町に定住し、92歳で砥部町名誉町民に選ばれる。2006年(平成18年)97歳で砥部町にて永眠。

20歳から短歌に精進するが、41歳で詩に転じ、個人詩誌『詩国』を発行し続けた。仏教伝道文化賞、愛媛県功労賞、熊本県近代文化功労者賞受賞。

一遍上人を敬愛し、午前零時に起床して夜明けに重信川のほとりで地球に祈りを捧げる生活。そこから生まれた人生の真理、宇宙の真理を紡ぐ言葉は、弱者に寄り添い、癒しと勇気を与えるもので、老若男女幅広いファン層を持つ。

坂村真民の詩の魅力

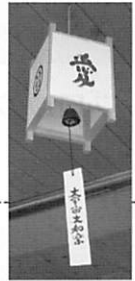
- 1 真民詩の中で一番多いのが、家族を詠った詩
 「三人の子に」「飯台」「あの時のことを」
- 2 人間としていかに生きるか、人生をどう生きるかを探求し続け、辛い悲しい体験を乗り越えて、前向きに生きることを求め続けた詩人
 「六魚庵箴言」「身軽」「大事なこと」
- 3 真民の求める生き方を、自分自身が実践するなかで詩として残している。



「尊いのは足の裏である」「あとから来る者のために」「時」

4 人はどんなに悲しくても、苦しくても生きなければならないというメッセージ

「念ずれば花ひらく」「鳥は飛ばねばならぬ」「タンポポ魂」



坂村真民 略年譜

1909	(明治 42 年)	0 歳	1 月 6 日熊本県玉名郡府本村 (現在の荒尾市) に生まれる。
1917	(大正 6 年)	8 歳	9 月、父急逝。生涯の大転機となる。
1931	(昭和 6 年)	22 歳	3 月、神宮皇学館本科国語漢文科を卒業。 4 月、熊本に戻り、画図小学校の教員となる。
1934	(昭和 9 年)	25 歳	4 月、全羅南道順天女学校の教員として、朝鮮に渡る。
1945	(昭和 20 年)	36 歳	11 月、朝鮮より引き揚げ、熊本に帰る。
1946	(昭和 21 年)	37 歳	5 月、家族を連れて四国へ渡り、愛媛県三瓶町の私立山下高等女学校 (後の県立三瓶高等学校) 教諭に着任する。
1950	(昭和 25 年)	41 歳	1 月、個人詩誌「ペルソナ」を創刊し、長い短歌生活に別れを告げる。 4 月、県立吉田高等学校に転勤する。
1951	(昭和 26 年)	42 歳	臨済宗妙心寺派専門道場のある大乘寺を知る。 4 月、第一詩集「六魚庵天国」を発行する。
1956	(昭和 31 年)	47 歳	以後、毎年一冊ずつ自費出版の詩集を発行する。 目の病に引き続き内臓の病気に罹り生死を彷徨うが、利根白根先生の助力により大難を克服する。
1959	(昭和 34 年)	50 歳	4 月、県立宇和島東高等学校に転勤する。
1962	(昭和 37 年)	53 歳	9 月、初めて道後の宝蔵詩を訪ねる。
	(昭和 41 年)	57 歳	6 月、森信三先生にお会いし、「詩国」発刊の一大教示をいただく。 7 月、個人詩誌「詩国」を創刊する。
	(昭和 42 年)	58 歳	3 月、県立吉田高等学校を最後に高校教員を定年退職する。 4 月、県立吉田高等学校の非常勤講師 (1 年間) となる。
	(昭和 46 年)	62 歳	2 月、大東出版社より「坂村真民詩集」刊行される。 4 月、宇和島市から松山市に引っ越す。 4 月、私立新田高等学校の講師となる。
	(昭和 49 年)	65 歳	9 月、伊予郡砥部町に居を定める。
	(昭和 60 年)	76 歳	11 月、朝日新聞全国版インタビュー欄に記事が掲載され、全国から「詩国」の購読希望が 1,000 通以上来る。
	(平成 2 年)	81 歳	3 月、私立新田高等学校を退職する。
	(平成 6 年)	85 歳	10 月、「坂村真民全詩集」(大東出版社) 第 1 巻刊行される。
	(平成 11 年)	90 歳	1 月、「開花亭」にて「朴庵例会」が始まる。
	(平成 16 年)	95 歳	2 月、妻・久代「くも膜下出血」で倒れる。 11 月、愛媛県功労賞を受賞する。
	(平成 17 年)	96 歳	1 月、朴庵例会を 171 回で終える。
	(平成 18 年)	97 歳	2 月、「詩国」500 号を刊行し、終刊とする。 9 月、「鳩寿」15 号を刊行し、終刊とする。 5 月、この頃より体調管理のため砥部町内の病院に入退院を繰り返す。 8 月、体調不良で再入院する。 12 月 11 日老衰のため砥部町にて永眠する。享年 97 歳

あとから来る者のために
 あとからくる者のために
 苦労をするのだ
 我慢をするのだ
 田を耕し
 種を用意しておくのだ
 あとからくる者のために
 山を
 川を
 海を
 きれいにしておくのだ
 ああ
 あとからくる者のために
 苦労をし
 我慢をし
 みなそれぞれ力を傾けるのだ
 あとからあとから続いてくる
 あの可愛い者たちのために
 未来を受け継ぐ者たちのために
 みなそれぞれ自分ができる
 何かをしてゆくのだ

〔全集第八巻〕より
 (平成十九年十二月発行)

真民さんの言葉にふれて
 松山市立難波小学校 越智文明

「念ずれば花ひらく」を友人から教えてもらったのは、高校時代だった。しかし、最近まで、私にはそれ以上の真民さんについての教養はなかった。全く恥ずかしいことである。

昨年(平成 24 年)11 月、坂村真民記念館館長・西澤孝一さんのお話をうかがう機会を得た。この数十年間、冒頭のチャンスを生かさなかった自分の愚かさを悔いた。「本気になる」と世界が変わってくる 自分が変わってくる…(「本気」より)。「真の人間になろうとするためには 着ることより 脱ぐことの方が大事だ…」(「大事なこと」より)。西澤さんが紹介される真民さんの言葉の一つ一つは、私の生き方への問いでもあり、迷いへの道標でもあった。

西澤さんのお話をうかがった帰り、私は書店に立ち寄った。もちろん、真民さんの言葉に、もっとふれるためである。

ブロック紹介

ブロックのささやかな活動

第1ブロック理事 落合 常章

第1ブロックは、番町、味酒、八坂、東雲、清水、姫山の六つの小学校区と勝山中、東中の二校区からなる地域です。文教地区を中心に、日々の教育活動を行っている落ち着いた校区です。しかし、支部活動は単一では中々活動しにくく、ブロック全体で活性化を図るよう、前年にアンケートを配り、会員の意識調査を行いました。その結果、身体を使った活動が一番多く希望していることが判明しました。そこで、各支部の支部長さんと相談し、今年度次のような計画を立案いたしました。

① 運動は行いたいが入力が入らないという会員のために、定例のソフトボールの実施

6月から始め、月に2回の練習日を設定し、毎回楽しく身体を動かしています。しかし選手？の数が8～9人ぐらいです。他のブロックの会員の方も参加していただくと更にもり上がると思います。是非参加をお願いします。来る者こぼれ去る者追わずの精神です。時間とおひまの方はどうぞ！老いは、足腰からです。少しでも老化を防ぐため。

② 精神安定のために、坊っちゃん劇場への鑑賞を行いました。

参加人数20名、女性の方も多く参加していただき、有意義な一日を過ごしました。

③ 道後村ミステリーゾーン体験として、道後の知らない部分を初めて知り、改めてその良さを体感しました。参加8名で歩くことによりお互いを知る良い機会になりました。

これを定例にしたいという希望もあり、次回も計画中です。

少しでもブロックの活性化を目指して、日々努力の毎日です。この輪を広げる夢を！

『土曜塾』始まる

松山市のPTAや社会教育の関係者らで構成されている「松山市青少年育成市民会議」は、市からの委託を受け、昨年6月、築山町の市青少年センターで「土曜塾」を開講いたしました。

笑顔で楽しく
土曜塾
SATURDAY SCHOOL

この「土曜塾」は、市の「子ども健全育成事業」の一つで、経済的な理由で塾などに通えない子どもたちの学習を支援しようという趣旨で始まりました。現在、市内の中学校1～3年の計46名が、毎週土曜日、ボランティアの大学生の指導やアドバイスをを受け、熱心に学習に取り組んでいます。

9時から12時までが前半の授業。1時間の昼休みの後、13時から16時までが後半の授業。弁当持参で9時から16時まで一日中頑張っている生徒も10名近くいます。塾生は、学校の授業の復讐や宿題の片付け、応用問題集の解き方等について、サポーターの愛大生や松大生たちの個別指導を受けながら、自らの学力アップに励んでいます。

熱心にセンターにやってくる塾生たちの学習意欲を尊重し、彼らの「自主・自立の精神、自学の態度」の育成に貢献できるよう、塾経営の更なる工夫・改善を図っていきたいと思います。そのことが、彼らの学校生活の一層の充実に繋がってくれることを願いながら…。



塾の学習風景